

〔書評〕

田口道昭著 『石川啄木論攷 青年・国家・自然主義』

水野 洋

〈等身大〉を浮かび上がらせる

本書には、著者田口道昭氏が研究者として活躍を始めた一九八九年発表の論文「中野重治の啄木論」から今日に至るまでの二八年間、石川啄木に関する研究の成果をまとめた二四編の論文が収められている。

その第一部は、八編の論文を収めた「啄木と日本自然主義」である。今日の一般的な文学史の本にあつては、この点にまで論述されるのが少ないのであるが、当時の自然主義文学は、単なる文学潮流としてだけであつたのではなく、おのれの文学・芸術観とからめてそこにいかに生きるかという哲学的な問題をめぐつて、いわゆる〈芸術と実行〉の問題として、多くの作家・評論家たちを巻き込んで当時盛んな議論が交わされていたのである。中学を中退し、故郷を追われ、家族を抱え職も定まらない、放蕩に身を持ち崩しながら、文学者と実生活者という、この「二重の生活」をいかに統一していくかに苦闘しながらこの論争に加わつて

いった啄木の姿が、評論を中心とした考察で明らかにされていくのである。

その延長線上に、短歌や詩にどう影響を及ぼしていったかを論証した件には、著者の鋭い考察が生きている点が随所に見られ、本書の魅力ともなっている部分であろう。詳しい内容は本書をお読みいただくとしたいが、ここではその一例を紹介しておこう。

東海の小島の磯の白砂の

われ泣きぬれて

蟹とたはむる

この有名な『二握の砂』の冒頭の歌に、「〔外部〕を閉ざされた青年たちの〈閉塞状況〉」(第二部二章「時代閉塞の現状」まで)を読みとり、二重生活の統一に苦闘した啄木自身のどうにもならない閉塞感を指摘したところは、著者の読みの見事さが際立っている部分でもあると思う。

そうした〈芸術と実行〉論争の過程をたどり、国木田独歩、島村抱月、長谷川天溪、田山花袋、岩野泡鳴、高山樗牛、田中王堂、近松秋江ほか、同時代の数多くの文学者たちとのかわりを見ながら、彼らとの比較・対照によって同時代の中の啄木の位相が解き明かされていくのである。

ここで、著者による「あとがき」を頼りとして、第二部以降の内容を紹介しておく。

第二部は「時代閉塞の現状」論で、啄木の代表的な評論である「時代閉塞の現状」に関する論文四編と、「同時代言説とのかかわりを整理しないと読みにくい『古典』」となった評論「時代閉塞の現状」の詳細な注釈一編を収める。

第三部は「啄木と同時代人」。与謝野晶子、漱石・教養派、徳富蘇峰、石橋湛山など「啄木を同時代人の言説の中で浮かび上げさせようとした」論文四編がある。

第四部は、「啄木的位置をめぐって」で、「啄木像、ならびに啄木の文学史的・思想的・研究史的位置について考察した論文」が三編あり、ここに著者が最初に発表した「中野重治の啄木論」もある。ここは比較的初期に書かれたものが収められている。

最後の第五部は、「啄木の歌集や短歌、晩年の詩を考察」した論文四編であり、「握の砂」に関する論文、「地図の上朝鮮国にくろぐろと墨をぬりつ、秋風を聴く」の歌をめぐる考察、そして、伊藤博文がとりあげられ、締めくくりに「呼子と口笛」論（二重の生活）のゆくえ」がおかれる。

第一部に始まり第五部に至るまで一貫しているのは、同時代の資料を掘り起こすことによって啄木が生きていた明治の末という時代の空気をあきらかにしたことであり、その中で、直接に交流があった、あるいは大きな影響を受けた同時代の多様な文学者・思想家と比較・対照するという方法である。「時代閉塞の現状」で批判された魚住折蘆はいうに及ばず、石橋湛山、阿部次郎、与謝野晶子、伊藤博文、幸徳秋水など、先に挙げた人物を含めて、啄木との関係で考察の対象にのぼったのは30名以上にも及ぶ。

このように多くの同時代人を登場させた点については、著者自身の明確な意図と目的意識が存在するのである。すなわち、それにより啄木を「同時的文学・思想の中に位置づける」「できるだけ〈等身大〉の啄木を明らかに」（「序」）したい、さらに「同時代思想や文学との比較の中で、啄木の文学や思想の水位を明らかにしようとした」（「あとがき」）ことの結果である。そして同時代の「日本人」と「〈対話する啄木〉の魅力」（「あとがき」）を明らかにしたい、という著者の思いの表れでもある。

私自身も、啄木研究にとりくんでいた時期があり、そんな時、田口道昭氏の最初の論文「中野重治の啄木論」を読んだときの驚きは、今日でもまざまざと思い出すことができる。

中野重治による「啄木に関する断片」に始まる一連の啄木評論は啄木研究における「先駆的業績」としてひとくくりにされ、古典的権威ある評論として、各論者に都合のいいように引用、言及されることはあっても、これをまともに研究の対象とするような

雰囲気は当ても皆無ではなかったかと思う。いわば、すでに過去のもの扱いされていた観があったのだ。

そんな時、中野重治をあらためて同時代の中において等身大の中野重治を見出し、中野重治の啄木評論の魅力を語り、同時にこれまでの啄木研究が見落としていた点を指摘したところなどは、同時期の啄木研究者たちに大いに刺激を与え、また、反省を促したのではあるまいか。少なくとも、この私が、田口道昭氏のこの論文によって啓発された者の一人であったのは間違いない。

してみると、本書で目指された、先入観を持たずに、同時代の水位に置いた「等身大」の啄木」像は、著者が研究のスタート時点から一貫して持ち続けてきた問題意識であったことがよくわかる。だが、今日また、私がこの論文を読み返してみたところ、いくぶんの物足りなさを感じたところもあった、というのが偽らざる感想でもある。著者によると、発表当初の「『檄文』めいた文体」（あとがき）を多少改めたとのこと。してみると、当時のあの勇ましい文体に私などは魅力を感じていたのであろう。そして、今回、収録するにあつて少しトーンを落とすのだと思う、著者が描いた〈戦鬪的啄木像〉に変更を加えたという。若き日の私はそのような論文の戦鬪的な面に、おおいに魅了されていたものであろう。

さて、ここまで述べてきた「等身大」の啄木」を浮かび上がらせて最もその特色を発揮したのは「時代閉塞の現状」に関する一連の論文である、というのが私の見立てである。

これまでの啄木研究の中で、真剣に考察されることが少なかった、あるいはあえて無視されてきた面もあるのではないかと、思えるのが啄木における「ナシヨナリズム」あるいは「ナシヨナル」なものへの共感である。まず著者田口氏はこれを丹念にひろいあげていく。

第二部の「時代閉塞の現状」論」第二章「時代閉塞の現状」まで——渡米熱と北海道体験——において、啄木が一時渡米熱に浮かされたことをとりあげ、自由の国土をあこがれる浪漫的な心情は、またその一面でナシヨナルな感情に彩られている点を読みとり、そして、啄木の場合、渡米がかなわぬ代償として、それが北海道や朝鮮などの〈外部〉への夢へと変わっていくのである。そうしたときに大逆事件にぶつかり、拙論の初めに紹介した『一握の砂』の冒頭歌「東海の……」の解釈につなげられていく。

歌集は、〈外部〉に脱出を試みようとして出られなかった歌の主人公が、過去の回想の時間を経て、再び（いま）この現実生きようとすることを示している。そこに啄木の歌の批評性を読み取ることができよう。

その批評性の起点となったのが評論「時代閉塞の現状」であり、それは、アメリカや北海道という〈外部〉に抱いていた浪漫主義が閉ざされ、また、それを捨てることによって直面した〈現実〉が「国家」＝「強権」に閉ざされているという閉塞感の中で執筆されたのである。

（第二部第二章「時代閉塞の現状」まで）

という具合に閉塞感に至る状況が明らかにされる。

そして、本書の白眉ともいえるのが第二章の論文「啄木における〈天皇制〉について——『時代閉塞の現状』を中心に——」であろう。

ここで著者が試みたのは、あらゆる思い込みや先入観を排して、素直にテキストに向かい合い、一字一句をできるだけ忠実に読みとるという当たり前な作業である。啄木作品においてもっとも有名なこの評論は、戦前の中野重治から今日に至るまで、論者の側のような思い入れを込めて読まれ、「同時代文脈を逸脱して論者の〈願望〉が投影される」「論者にとって好都合な部分をつなぎあわせるかたちでの（つまみぐい）がなされることが多い」（あとがき）、そうした解釈がまかり通ってきたという著者の指摘は十分に首肯できるものだ。だからこそこの至極まっとうな方法が有効たり得るのだ。

「時代閉塞の現状」で有名な一節、「我々の中最も急進的な人達」を「幸徳（大逆）事件被告たち」と解釈した今井泰子の誤りを正し、さらに、〈天皇制〉批判に進み出ていったとした中野重治が始まる、今井泰子、近藤典彦まで、現在なお続く解釈を厳しく批判、そこに「一九九一年秋の啄木の認識から遡行して読み取ること」の誤りを指摘する筆致は見事というほかない。「啄木の文章をはじめ、できるだけ当時の文章に語らせる」（「序」）手法

でもって同時代の空気を再現し、「等身大」の啄木を描き出した田口氏の真骨頂が発揮された部分であり、読んでいてまったく胸のすく思いがするところでもあった。

こうした観点に立脚し、イデオロギーが先行していた従来の読みを見直していくことで、本書はいくつもの成果を上げること成功している。

その一つ。随想「きれぎれに浮かんだ感じと回想」において示した啄木が述べた徳富蘇峰に抱いた共感にたいして、著名な歴史学者鹿野政直は「このしたたかな国家主義者について、なぜのようなことばをのこしている」（「啄木における国家の問題」）という戸惑いのことばをもらしている。

民権論から国権論へと〈変節〉し、政府の御用学者とみなされた徳富蘇峰と、強権を敵とし、それと対峙することを唱え、〈天皇制〉の批判に進み出て、「社会主義」「無政府主義」を理想とした啄木という従来の図式をもってすれば、蘇峰への共感は鹿野の言うとおり「なぞ」ではない。しかし、第三部第三章「啄木と徳富蘇峰」で田口氏が示した、啄木のナシヨナリスティックな心情と実際の重んじる傾向を正しく読みとっていけば、この問題の一節も無理なく理解できるのである。実に啄木研究における長年の懸案が著者によってはじめて鮮やかに解決された瞬間と言える。

このように本書は、評論を中心に時に、短歌、詩を読み解いていくことで、啄木思想とその変遷を明らかにしたものである。こ

れまでしばしばなされてきた論者の側の思い込みや願望を投影させた読解をしりぞけ、できるだけ当時の文章に語らせて「(等身大)の啄木」を描き出す試みは成功し、師上田博氏の業績に続いて、ここに現在の啄木研究の到達点を示すものとなったといえる。今後の啄木研究は本書を無視することはできない。

なお、田口氏には、与謝野晶子を中心に明星派に関する論考もまた多数発表されている。早く一書にまとめられる日が待たれる。

(和泉書院、六八四頁、二〇一七年一月、本体価格七〇〇〇円)

(みずの・ひろし 履正社高校教諭)